特集
IDE Library
50

多言語資料収集五〇年

石井美千子

「多言語資料」という言葉は、パソコンが世界的に普及するとともに多言語対応になったことと密接な関係がある。二〇〇〇年、日本の共同目録データベースNACSISは「多言語対応目録システム」の運用を開始した。それ以来、従来「現地語資料」、「特殊語資料」などと言われていた資料は「多言語資料」と呼ばれるようになった。

アジア経済研究所図書館では創設当初から文字通り多言語の資料を収集してきた。三〇年ほど前のアジ研図書館には、タイ語、ビルマ語などの手動タイプライターが揃っており、それはそれで珍しかったものである。当時は日本語、中国語、ハングルは手書きで、その他言語はタイプを使って目録カードを作成し、毎週カードボックスにファイリングしていた。それがいまではデータベースに直接、目録を入力している。インターネットで出版国の大学図書館OPACを参照して記述の参考にしたり、コピー・ペーストして入力の手間が省けたりもする。パソコンの多言語対応によって図書館の仕事も大きく変化を遂げた。

●アジ研図書館の多言語資料

それではまずアジ研図書館の多言語資料所蔵状況を紹介することにしたい。

図書館に入館すると、まず一階には雑誌や新聞が発行国別に配架されている。棚を見てまわれば、英文や和文のほかに、中国語、コリア語、タイ語、アラビア語その他諸言語の様々な文字を雑誌の表紙や新聞の題字に見るだろう。初めて来館される方は、ここで地域研究専門図書館特有の雰囲気を感じとられるようだ。

つぎに四階に行ってみることにしよう。四階は製本雑誌と、中国書、コリア語図書およびその他諸言語資料を収蔵するフロアである。吹き抜けを取り囲む大きなスペースの半分を占めているのが中国語図書、つぎに多いのがコリア語図書で、中国語とコリア語のエリアの間にその他諸言語の図書がある。そのうち蔵書数が多いのはアラビア語、タイ語、インドネシア語、ベトナム語、トルコ語など。別表にあげたのは一〇〇冊以上所蔵する言語の冊数である。その他の言語は二四種あるが創立初期に収集された辞書や語学教科書が多く、新たなものはあまり加わっていない。しかし、なかには本国の人も見たことがないという辞書もあり、ある意味で貴重な蔵書といえるかも知れない。

各言語の図書をみると、それぞれの国の経済発展の状況を目で見ることが出来、興味深い。たとえば、近年、急速な発展を遂げているベトナムなど、二十数年ほど前には茶色のわら半紙に一色か二色刷りの薄い表紙の本が多かったが、いまではしっかりした紙に鮮やかに彩色された表紙の本が増えている。出版点数の伸びも目覚ましく、海外への発送にも速やかに応じてくれる書店もあり、蔵書数は今後もっと増加するだろう。本をモノとして取り扱うなかでも、このように各国の経済状況の変化を感じられるのが図書館の仕事の面白いところである。

二階は洋書・和書、三階は洋書のフロアである。三階奥には統計資料コレクションのエリアがある。ここには言語にかかわらず、各国の統計データ主体の資料が配架してあり、このなかにも多言語資料が含まれている。また、統計資料には現地語と英語が併記されているものが多く、当図書館で

多言語資料所蔵冊数

中国語	42,525	マレー語	747
コリア語	21,350	ペルシャ語	705
アラビア語	6,479	ラオス語	222
タイ語	5,300	ビルマ語	136
インドネシア語	4,413	その他（24言語）	364
ベトナム語	2,261		
トルコ語	1,122	計	85,624冊

統計資料、製本雑誌をのぞく　（2009年12月末現在）

はこれらの併記資料は多言語資料の蔵書数にカウントしていない。中国語などをのぞき、目録も英語で採録してきたが、最近は図書の記述どおりに二言語表記の目録を作成している。これらの統計資料もカウントすれば、多言語資料蔵書数はもっと多くなる。

●多言語資料の目録

二〇〇〇年以降NACSISで順次、中国語、コリア語、アラビア語・ペルシャ語、タイ語文字の入力が可能になったのを受けて、当図書館でもこれら言語の目録を原綴でデータベースに入力するようになった。そこで始まったのがカード目録のデータベースへの遡及入力である。現在、中国語、コリア語、アラビア語、ペルシャ語、タイ語、インドネシア語、マレー語、ベトナム語の目録は一部、年刊資料等が未遡及で残っているもののほとんど遡及入力が終了し、原綴でOPAC検索が可能である。

「多言語対応目録システム」によって目録作成は大いに進化したが、実のところこれで業務が楽になったとばかりはいえない面もある。中国語書名には日本語のよみ、コリア語書名にはハングルでよみの分かち書き、タイ語書名はローマ字翻字とタイ語の分かち書きを併記することになっており、よみふり、翻字、分かち書きのルールを覚える必要がある。アラビア語などは、右から書くアラビア文字と、左から書くローマ字翻字を混在させるため、大変煩雑な作業になる。著者名フィールドでもよみふりと翻字は必須である。中国語、コリア語以外では著者名フィールドをローマ字翻字で記載することになっているが、個人名は辞書で発音を調べられるとは限らないから翻字には困難がともなう。

現在、図書目録の世界で採用されている米国議会図書館方式の翻字法はそれぞれの言語を母国語とする人にはかえってわかりにくく、翻字はアルバイト留学生にとっても厄介な仕事になる。チェックする職員にとっても注意を要する部分である。幸い業務用NACSISに参照データとして搭載されている米国OCLC（Online Computer Library Center）の目録データベースで多言語資料のローマ字翻字目録がわりあいよくヒットするのでそれを流用すれば翻字の手間を軽減できる。しかし、これも正しい翻字で検索しないとヒットしないのが難点である。

ローマ字翻字は利用者にも大変わかりにくいと評判が悪い。ラオス語、カンボジア語、ビルマ語など「多言語対応目録システム」でもまだ未対応の言語があり、これらの言語はローマ字翻字で入力するしかなく、利用者には不便をかけているのが実情である。「多言語対応目録システム」の対応言語が増えることを願うばかりである。

●五〇年の蓄積を生かして

アジア経済研究所の基本理念として「三現主義」というものがある。「現地語を用い、現地資料にあたり、現地に滞在して研究する」ということである。アジ研創立後五〇年、途上国研究のすそ野は広がり、現地語と現地資料を駆使する研究者が増えている。アジ研図書館が所蔵する多言語資料＝現地語資料がよりいっそう生かされる時代になったといえよう。いっぽう研究は多様化、深化しており各研究者の需要に十分に応えることは難しい。また、国によって違いはあるものの途上国でも経済発展とともに出版点数が増加しており現地語資料も選択的収集が必要になっている。研究者の見識を参考にしつつ、図書館として押さえるべきコア資料を再検討する必要がある。

アジ研では図書館員も語学研修、現地出張、海外派遣等をとおして、現地の資料・情報を取り扱うための知識や経験を積むことを求められてきた。また、実務で資料を手にとるなかで蓄積していく部分も大きい。各国の出版形態の特徴を知った上でこそ適切な目録記述も可能になる。日々、共同目録データベースに目録登録するなかでも、長年多言語資料を扱ってきた蓄積をもつ図書館ならではの役割があると感じることは多い。今後もこの蓄積を引き継いで更に高度に発展させることが課題である。

最後に、経年劣化が目立つ多言語資料の保存対策も重要課題としてあげておく。

（いしい　みちこ／アジア経済研究所図書館）